

丁寧な史料整理の成果

——留学生研究のさらなる一歩

小谷 一郎



奈良女子大学アジア・ジェンダー
文化学研究センター編
奈良女子高等師範学校と
アジアの留学生

A5判 432頁
敬文舎
[本体4500円+税]

このたび、奈良女子大学の野村鮎子さんたちがまとめられた奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター編『奈良女子高等師範学校とアジアの留学生』が敬文舎から出版された。本書は、先に同編、同名で刊行された内部発行の『報告書』をもとにまとめられたものである。私はこれまで『一九三〇年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』（汲古書院 二〇一〇年）を出すなどしてきた関係から前著に当たるその『報告書』をお送りいただき、野村さんたちのお仕事は目にしてきた。だが、内部発行である以上発行部数に限りがあり、入手出来る人も限定されていた。それだけにこの度市販されたことを素直に喜びたい。

本書は、表題が示しているように、現在の奈良女子大学の前身である奈良女子高等師範学校とアジア留学生との関わ

り、歴史や留学生生活その他をまとめられたものである。当時の奈良の女高師は、東京女高師（現在ののお茶の水女子大学）と並んで、「女子教育」の最高学府であり、そこには多くの留学生が来ていた。

私は本書によってはじめて奈良の女高師を認識させられた。そればかりではない。私は「女子教育」、女高師、高師などについて多くのことを教えられた。

奈良は戦災を受けていない。このため奈良女子大には奈良の女高師に関する多くの史料が残っている。本書はこれらの史料を駆使して書かれたものである。また、そこには「先行研究」、桃山学院大学などの「学外史料」なども活用されている。加えて、野村さんたちスタッフの方々がじっくりと腰を据えられ、史料、先行研究などに丁寧な当たり、学外史料なども

好文出版

新刊

中国語修辞学

王希傑著
修辞学研究会訳

A5判／五六六頁 本体五、八二〇円＋税
中国における修辞学研究の第一人者である王希傑、その著作の中でも圧倒的なシニエアを誇る『漢語修辞学』を翻訳。日本語での読者を想定し、引用文には日本語訳を付けた。また、巻末には日本語版独自の語句索引を載せた。

【ISBN978-4-87220-192-5】

現代中国語の移動を表す

述補構造に関する研究

A5判／本体四、〇〇〇円＋税 島村典子著
現代中国語における述補構造を体系的に理解。移動を表す述補構造の述語動詞が表す様々な意味に着目することにより、従来あまり取り上げられなかった言語現象を提示し、独自の見解を示した。

【ISBN978-4-87220-198-7】

現代中国語における前置詞の機能分化と動詞とのかわり

A5判／本体三、五〇〇円＋税 中西千香著
前置詞の機能分化の過程を具体的に説明。前置詞と動詞とのかわりからその選択条件をみる。動詞に加え、動詞フレーズによる選択を検証。動詞からみた前置詞のコロケーションリストの附表掲載。

【ISBN978-4-87220-185-7】

〒162-0041 東京都新宿区
早稲田鶴巻町540 林3F
Tel.03-5273-2739 Fax.03-5273-2740

<http://www.kohbun.co.jp/>

使いながら、それらを本書の中に生かされているからであろう。本書には単なる「学校史」だけには止まらない、留学生全体への豊かな広がりがある。本書の魅力もここにある。

本書は序章を含む全九章からなっている。序章には学内史料、学外史料、先行研究のことなどがまとめられている。

第一章は「留学生の在籍概況」である。ここでは、留学生の在籍数やその推移、留学生の卒業後の進路などについて記されている。

第二章は「留学生の進路」。私にはこの一節「大学への進学」が興味深かった。

奈良の女高師は、大正一三年から他の東京高師、広島高師、東京女高師と共に大学への「昇格運動」をはじめたが、残念

ながら果たせなかった。男子の東京高師、広島高師には文理科大学が設置されたが、女高師ではかなえられなかった。だが、その代替措置として女高師卒業生には先の二つの文理科大学への進入学が認められた。これによって女高師から文理科大学、大学に進む者たちが出るようになる。私はこの関係

を本書で再認識させられた。

第三章、第四章は本書でもっともスペースが割かれている。第三章は「留学生受け入れ政策と制度の変遷」である。ここでは、アジア留学生の歴史が明治・大正期、昭和初期から

満州事変まで、満州事変から対米英戦突入まで、対米英戦突入から敗戦までの四期に分けて展開されている。

第四章は「国・地域別にみた留学生」である。ここでは、第三章を受けるかたちで、「一、清国留学生」、「二、朝鮮留

学生」、「三、中華民国留学生」、「四、満州国留学生」、「五、台湾留学生」のそれぞれについて具体的に論述されている。印象的だったのは「二、朝鮮留学生」で、奈良の女高師と朝鮮からの留学生の関係、柳原吉兵衛のような篤志家の存在などを始めて知った。

第五章は「留学生の修学旅行」。ここでは、留学生の修学旅行について留学生たちの旅行記などをもとにまとめられている。

第六章は「留学生の生活」で、留学生たちの女高師での生活を、学業成績、寮生活、恋愛問題といったトピックに分けてまとめたものである。

奈良の女高師は全寮制だった。東京女高師、東京高師、広島高師は全寮制ではない。留学生を含む全寮制であったことは奈良の女高師の女子教育のあり方を示す大きな特徴である。寮生活では留学生も日本人学生も共に相部屋で生活していた。

私は一昨年夏、野村さんの案内で奈良女子大学にお伺いし、奈良女高師時代の旧本館、現在の記念館を拝見させていただく機会を得た。記念館一階の中央奥には女高師の建物全体を示すミニチュアの模型が展示されていた。寮は校内の一番奥にあった。舎監の住むところと繋がるようにして、寮は第一

棟から第五棟まで整然と並んでいた。ここに留学生たちが日本人学生と共に暮らしていたのかと思うと、圧倒された。だが、残念なことに本書にはこのミニチュアの写真が収められていない。この写真、大学全体を示す図があれば、と思った。

展示されていた女高師の学校生活、授業風景、寮生活の写真も興味深かった。女高師では体育の授業に「セーラー服」が着用されていた時期がある。ある体育の授業の写真は円盤投げだった。例えば、奈良の女高師は体育に力を入れ、健全な身体に健全な精神が宿るとし、体育は近代競技を採用していたという。理科・物理化学の授業写真もあった。寮生活では皆ですき焼き鍋をついついている写真もあった。写真は必ずしも留学生を写した写真ではない。だが、当時の女高師での生活、寮生活を知る縁としてこうした写真が本書にあっても良かったのではないだろうか。

第七章は「留学生とナショナリズム」で、ここでは留学生に対する郵便の「検閲」、女高師での「山東出兵反対運動」、「満州事変」と中国人留学生、朝鮮人留学生の民族運動のことが記されている。印象的だったのは、朝鮮人留学生の「抵抗」としての「和裁拒否」、「木槿会」への参加の叙述である。

第八章はスタッフの元留学生三名、家族二名へのヒヤリング調査記録である。いずれも文献資料だけでは計り切れない

「実体験にもとづく貴重な証言」であることは言うまでもない。さらに、巻末には詳細な「留学生関連年表」が付されていて、大きな助けになっている。

以下は蛇足に近い。

本書には二五種類にも及ぶ「表」が出てくる。この「表」は野村さんたちが膨大な史料をもとに長い時間をかけてまとめられたものであろう。

なかでも留学生全体についてまとめられた「表2 本科・保姆養成科卒業留学生一覧」(三三三頁～四二頁)、「表15 朝鮮留学生在籍者一覧」(二七九頁～一八〇頁)、「表16 中華民国留学生本科在籍者一覧」(二〇六頁～二〇七頁)、「表17 中華民国特設予科在籍者一覧」(二〇八頁～二一〇頁)、「表18 満洲国」留学生本科在籍者一覧」(二三〇頁～二三二頁)、「表19

「満洲国」留学生特設予科在籍者一覧」(二三三頁～二三三頁)などは圧巻で、そのご苦労には頭が下がる。これは本書ならではの成果であろう。それだけに、これらの「表」の内容を示す「索引」があればと思った。「学内史料」などの一次史料の「一覧」も大切だが、それらをもとに導き出されてきた「表」はまた違う重みを持つはずだからである。

私にはこうした「表」に出てくる留学生一人一人について言及していく力はない。これらの「表」に見える留学生各人に対する研究、彼女たちがその後の時代の歴史の中で辿った軌跡、それが持つ意味は、いずれの時にか必ずや明らかになっていくだろう。私はそれを期待して止まない。

ここでは、「表」にある留学生の一人蔡素馨に関することを記して書評の責めの結びとしたい。

道坂昭廣著

『王勃集』と王勃文学研究

初唐四傑の一人、王勃の文学を探究し、さらに日本に伝わる彼の文集について精査する。王勃の文学とその周辺・日本伝存『王勃集』の意義・日本伝存『王勃集』をめぐるの三部構成。

7000円

既刊 詩人の視線と聴覚 王維と陸游 入谷仙介著 7000円

中野 清著

中国怪異譚の研究

——文言小説の世界——

六朝の志怪と唐宋の伝奇の流れを汲む。袁枚が著した『子不語』を中心に据え、中国文言小説について縦横に論じる。序論に文言小説の流れを置き、「鬼求代説話」研究・「僵尸説話」研究・『子不語』の版本研究・古小説研究の四部で構成する。

6000円

研文出版 <税別>

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

私は九三年五月、「東京左連結成前史(その二)(補二)——

夏衍の再来日をめぐって、夏衍と藤森成吉のことなど」と題した論文を発表したことがある。この論文は、劇作家で一九三〇年代中国左翼作家連盟の中枢部にいて活躍した夏衍が、「三〇年代の生き証人」を自認して書いた夏衍自伝『懶尋旧夢録』に対する疑義に端を発したものである。夏衍はそこで二七年五月に日本から帰国した後、再来日していないと言い、自伝には「再来日」に関する部分、二八年から二九年までの日本での事項が書かれていない。私の論文はその「空白部」、夏衍と藤森成吉、藤森成吉の戯曲『犠牲』の訳出、青年芸術家連盟のことなどについて埋めたものである。

では、なぜ夏衍は自身の「再来日」について何も語らなかったのでしょうか。そこに夏衍の奥さんとなる蔡素馨が関係している。蔡素馨は、その頃東京にいて、東京美術学校にいた王道源、許幸之、司徒慧敏等が活躍していた青年芸術家連盟に参加していた。夏衍もその一員だったと言われる。

だが、蔡素馨は日本を離れたくなかった。夏衍が再来日したのは、この蔡素馨の帰国を促すためである。つまり、夏衍『懶尋旧夢録』からは夏衍、蔡素馨に関するプライベートな部分が意識的に切り落とされている。だから、一九二八、九年の「夏衍再来日」に関する事柄が自伝『懶尋旧夢録』には何も記さ

れていないのである。

私は論文執筆時、蔡素馨その人の軌跡については何も分らなかった。だが、私は本書によって一〇数年ぶりに彼女と出会うことになった。本書第四章「国・地域別にみた留学生」「特設予科一期生」に出てくる蔡淑馨が蔡素馨である。私はそこで蔡素馨に関してすでにいくつかの研究が出ていたこともはじめて知った。

中国人日本留学生に関する掘り起こし作業はある意味で地味な研究かも知れない。なぜなら、そこで掘り起こされる事実はほんの小さな「点」だからである。だが、その小さな「点」は、いずれの時にかまた別の「点」と出会い、一つの「線」となり、「面」となるかも知れない。

私は本書のようなお仕事が今後も現れ、新たな「点」や「線」が出来、いつの日かそれが「面」となることを心から念じて止まない。

(こたに・いちろう 埼玉大学名誉教授)